

大殺陣（その二）裏と表

「これは……敵しいわね……」

荒牧小夜は肩で息をしながら、剣先を向けてくる八十余の武士たちを見つめました。結んでいた髪はほどけてざんばらになり、返り血が美しい顔を赤く染めています。

小貝の森で、小夜と百人の武士たちの戦いが始まって、はや小半刻（約三十分）。

すでに十八人の敵を倒しました。人間の肉を斬り、骨を断ち、そして食い込んだ刃を引き抜くには、かなりの力が必要です。いくら並外れた剣技の持ち主といえども、体は女。すでに腕には疲労が溜まり、息は乱れ、立っているのもやっと。そして、敵はまだまだ、八十人以上も残っているのです。

しかし、刀を構えた八十余の武士たちは、なかなか小夜に斬りかかろうとはしません。

「どうした、かかれ！」

小幡伝太夫が声を枯らして叫びました。

「相手は疲れている。さっさと仕留めろ！」

それでも武士たちは動きませんでした。泰平の世に生まれ育ち、ろくに刀を振るった事もないのです。その彼らの目の前で、たった一人の女が、十三人を斬り、五人を去勢したのです。

もう少し、あの女が疲れてから斬りかかろう……。

それが全員の共通意識でした。小幡は焦ってわめきちらします。

「ええい、臆病者ども！ あの女を討ち取らなければ、仕官の道も、養子縁組もないのだぞ。しっかりとしろ！」

「拙者に任せろ」

そう言いながら、武士たちをかきわけるようにして小夜の前に現れたのは、夜鷹姿の赤牛弥五衛門でした。

「あ、弥生さん！」

小夜は眼を丸くしました。なぜ、弥五衛門が、しかも夜鷹姿で武士たちと一緒にいるのだろうか。

「まさか、あなたも捕まったの？」

「弥生じゃない。赤牛弥五衛門だ！」

弥五衛門は叫び返しました。

「どうということなの？」

「どうということも何も……」

小幡伝太夫が嘲るように言いました。

「あの夜鷹を誘拐したのは、何を隠そう、この赤牛殿だ」

「なんですって！」

小夜は、眼を見開きました。

「嘘でしょう、なぜあなたが、そんな真似を……」

「嘘ではない」

眼を伏せる弥五右衛門に代わって、平井権八が答えました。

「赤牛殿は、やはり武士なのだ。一時の気の迷いから女装して夜鷹の用心棒なんぞされていたが、ご母堂が御自害召されて目を覚めました。赤牛殿は今や、町奉行殿の命を受け、江戸の治安を守るために戦うわれらの同志なのだ」

「つまり……」

小夜は呻きました。

「……裏切ったのね」

「裏切りではない！」

小幡七郎右衛門も口を添えます。

「改悛されたのだ。武士が、夜鷹ふぜいの用心棒をやって生計をたてるなど、あつてはならぬ事。踏み外された道に、元通りに戻ってこられただけの事だ」

「許せない！」

小夜は叫び、弥五衛門を睨みつけました。

「町奉行から、何を与えと言われたの？ 仕官？ それとも養子の口？ そんなもののために、仲間を裏切ったわけ？」

じっと黙っていた弥五衛門、突然刀を抜き放ち、

「お前にはわからん！」

言うなり斬りかかってきた弥五衛門の太刀を、なんとか受け止めた小夜、再び力を奮い起こして戦いはじめたのです。

凄まじい剣戟けんげきが始まりました。互いに一步も譲らず鋭い太刀筋たちすじを繰り出し、しかしがちりと受け止め、あるいはかわし、何時、決着するとも分からぬまま、数十合じゅうごう、刃を合わせたのです。

しかし、やはり小夜は疲れていました。次第に劣勢になり、横薙よこなぎに一閃した弥五衛門の太刀をかわしながら、足下がよろけ、尻餅しりもちをついてしまいました。そのまま立ち上がる事もできず、切っ先を突きつけられ、じりじりと後ろに下がるしかありません。

「覚悟せよ」

弥五衛門が冷ややかに、刀を振り上げたその時……。

「ひとでなし！」

叫んだのは、縛られて地面に仰向けにされていた八重やえでした。

「きんたま一つ、小夜さんに潰されたくせに、何が武士だい！」

え……？

八十余の武士たちの眼が、一斉に弥五衛門に注そそがれました。

きんたま一つ、あの女に潰された？

それじゃ、養子縁組は無理じゃないか。子孫を残せないのだから。

しかも、女相手に不覚をとるなど、仕官の道も……。

「だ、黙れ！」

弥五衛門は八重にむかって怒鳴りました。

「まだ一つ残ってる！ おれはまだ、男だ！」

「じゃ、もう一個も潰してあげるわ！」

そう叫んで足を跳ね上げたのは、小夜でした。爪先つまずきがただ一つ残っていた鞆丸たもまるに命中し、弥五衛門は悲鳴をあげて仰向けに倒れたのです。

立ち上がった小夜に、三人の武士が斬りかかってきました。たちまち血飛沫しぶきをあげて絶命しましたが、同時に、小夜の膝が崩れました。

もう限界だったのです。それを見て、小幡兄弟が口々に叫びました。

「もはや、立っている事もかなわぬ。今だ！」

「やっつけてしまえ！」

その時。

「ぎゃあああ！！」

「ぐえっ！！」

武士たちの背後で悲鳴が起りました。

「母衣権兵衛が一子、母衣菊乃、見参！」

武士たちが一斉に振り向くと、八重を見張っていた三人、血にまみれた屍しかばねとなって転がっています。その傍らに立っていたのは、血の滴る太刀を手にした白装束しろしょうぞくの女剣士。

「母衣菊乃……！」

平井権八と小幡伝太夫が叫びました。菊乃も二人に気づきません。

「あ、お前ら、私が夜鷹の用心棒をやっているんじゃないかと探りを入れにきた、あの二人だな。八重さんを誘拐して、小夜さん呼びつけて、百人がかりで取り囲んで、いったい何のつもりだ！」

叫びながら、菊乃は刀を振るい、八重を縛っていた縄を一本、切断しました。

「何をする！」

斬りかかってきた二人の武士が、たちまち血を噴いて倒れます。新たに現れた凄腕の女剣士に武士たちが怯むなか、菊乃はほかの縄をすべて切断し、牛たちの尻を叩いて駆け去らせました。

自由になって起きあがった八重は、

「菊乃さん！」

と叫んで、菊乃の背中にすがりつきました。菊乃は八重を守るような姿勢で太刀を構えつつ、一言ひとこと絞り出すように言いました。

「八重さん、すまなかった。私は、やはりどこかに、落ちぶれても武士の身分だという、ぬぼれがあったのだ。生まれで人を差別していたのだ。最低の人間だ。だから、あんたに謝って腹を切ろうと思っていた」

「そんな……」

八重は、眼に涙をにじませながら、笑みを作っていました。

「菊乃さんも、小夜さんも、あたいのために命がけで助けにきてくれたんだ。もう、わだかまりはないよ」

「そうよ！」

小夜も立ち上がり、菊乃にむかって叫びました。

「切るのは、あなたのお腹じゃないわ。この卑怯者たちよ！」

「よっしゃあ！ 生まれ落ちてから二十年、鍛えに鍛えた我が剣を喰らえ！」

菊乃はそう叫び、上半身の着物のはだけて諸肌脱ぎもろはだに。白いさらしを巻いた胸は意外と

大きく、その豊乳に一瞬、武士たちは我を忘れて凝視します。

「何見てる、変態！」

菊乃は、真正面にいた武士の股間を蹴り上げました。たくましい菊乃の足に蹴られた武士は、両足が地面を離れて宙に浮き、どさりと落下した時には、二つの睾丸はこなみじんに破裂していました。

さらに菊乃、袈裟懸け、逆袈裟、唐竹割りりと縦横無尽に斬りまくり、それを見て息を吹き返した小夜も、唐人剣を振り回し、たちまち、新たに十数の屍が出来、数人が去勢され、残るは六十人余。

それを見た小幡七郎右衛門、背後から八重に走り寄ってその襟首を掴み、

「待て、刀を捨てる、さもないとこの女の……」

喉元に刀をつきつけ、命はないぞ、と続けようとして、

「ぐ……」

そう呻いて白眼を剥き、体を硬直させました。

八重の右手が、七郎右衛門の股間を掴んでいました。

「お生憎さま、あたいだって……」

そう言つて驚づかみにした睾丸をひねり潰し、泡を吹いて倒れた七郎右衛門の喉仏に踵を乗せて一気に踏み砕きました。

「さむらいのきんたまなんざ、数えきれないくらい、潰してきたんだからね！」

かくして、荒牧小夜、母衣菊乃、そして八重まで加わり、さらに小半刻、凄まじい戦いが続きました。さらに武士たちの屍が増えましたが、やがて時がたつにつれ、女たちの動きは鈍くなっていきました。

菊乃の加勢を得て、勢いを取り戻した小夜ですが、すでに疲労の極地にありました。菊乃もまた、次第に疲れを覚え、剣先が鈍くなっていきます。刀を持たない八重は、自分の身を守りながら、数名を倒すのがやっと。

対して、まだ五十余残っている敵は、まだまだ体力は残っています。

「女どもは疲れておるぞ！」

平井権八が声を張り上げました。

「必ず討ち取れ！」

やがて、三人は追い詰められ、互いの背中をくっつけあいました。もたれあっていると

言ったほうがいいかもしれません。立っていることすら、やっとだったのです。

「小夜さん」

肩で喘ぎながら、菊乃は言いました。豊かな胸を包んださらしも、白袴も、返り血に染まって真っ赤です。

「まだ、戦えそう？」

「そろそろ限界ね」

赤いさらしをさらに赤く染めた小夜は、そう答えました。菊乃が問いました。

「どうする。討ち死にする？ それとも、潔く腹を切る？」

「選べ、と言われたら討ち死にね」

そう答える小夜に、八重が言いました。

「殺してくれば、いいけれど……」

「どういう事？」

そう問う菊乃に、八重は唇を噛みしめました。

「わかんねえかな？ 犯されるかもしれないってことだよ」

その言葉に、小夜と菊乃は息を呑み、それから切っ先を突きだして囲んでいる五十余の武士たちを見回しました。

彼らは、小夜たちが疲労の限界にきている事を察知しているようでした。唇の端を歪めて笑い、眼をぎらぎらさせています。涎を垂らしている者もいれば、袴の股間を突っ立っている者も……。

「もう一息だ！」

平井権八が叫びました。

「女のくせに、男に逆らいやがって……。ただ殺すだけじゃすまねえ、生きていようが、死んでいようが、さんざん犯してやる。股ぐらが裂けて血まみれになるまで犯してやる。女は弱いつて事を思い知りながら死ぬがいい！」

それから武士たちを見回し、

「誰か、あの女どもを倒せ！ 倒した奴は、まっさきに犯させてやる！」

「俺がやる！」

「俺もやる！」

「俺もだ！」

三人の武士が太刀を振り上げ、女たちに斬りかかろうとしたその時。

「ぎゃー！」

「ぐえー！」

「ううー！」

その三人が一斉に悲鳴をあげて倒れました。いずれも、背中をまっぶたつに割られ、心臓を斬り裂かれています。

そして三人の背後には、夜鷹姿の赤牛弥五衛門が血塗られた太刀を手に、立っていたのです。

「あ、赤牛殿……！」

驚いて叫んだ武士がもう一人、弥五衛門の太刀に額ひたいを割られて絶命しました。

「き、貴様！」

小幡伝太夫が叫びました。

「寝返る気なのか？」

「寝返りじゃない！」

弥五衛門は、さらに狼狽する武士たちを斬り伏せながら、小夜や菊乃、八重に眼をやり、笑みを浮かべて怒鳴りました。

「表返ったのよ。これが私のほんとうの姿さ！」

「弥五さん！」

八重が、涙を浮かべて言いました。

「それでこそあんただ。素敵だよ！」

「ちがーう！」

弥五衛門は、武士の一人を袈裟懸けに倒しながら言い返します。

「私は、弥生だよ！」

かくして、再び剣戟の音が響き、気力を取り戻した小夜や菊乃も加わり、小貝の森はさらなる血煙に覆われたのです。

「おい」

頭巾で顔を覆った町奉行の小幡越後守えしろのかみが配下の同心たちに呼びかけました。

「早く、あれを」

同心たちは頷き、足下に置いてあった薦包みこもつつを開けました。火縄銃が二丁、入っております。

「誰を狙いますか？」

同心に問われ、越後守、

「いちばん元気な奴だ」

火縄に火がともされ、同心たちは狙いをつけました。

たあーん！

銃声が響きました。

倒れたのは、背中に二発、銃弾を浴びた赤牛弥五衛門でした。

「弥生ちゃん！」

八重が、俯うつぶせになった弥五衛門に駆け寄ります。その八重をめがけ、二人の武士が斬りかかりました。

「危ない！」

それを見た小夜と菊乃が駆け寄り、背後から武士の股間を蹴り上げ、うずくまったところを背中から串刺しにして、どめを刺してから、二人して八重を守るように、敵に向かって刃を向けました。

「もうよい！」

小幡越後守が怒鳴りました。

「わしも、お上かみに楯突たてつく不逞ふていの女どもが生きながら犯され、斃なぶり殺しにされる様を観たかったが、もはや堪忍ならん。鉄砲で仕留めるゆえ、その方ほうら、どいておれ」

すでに同心たちは、二発目を発射する準備を終え、火縄銃を構えております。武士たちは、さっと左右に分かれ、鉄砲は、まさに三人の女たちに向けられました。

「これがお上の力じゃ！ 武士の力じゃ！ 女なんぞがいか逆らおうと無駄だ！」

越後守はからからと大笑たいしょう。

「撃て！」

「させない！」

たあーん！

銃声が響きました。

倒れたのは、再び起きあがり、女たちを守るように仁王立ちになった、赤牛弥五衛門でした。

「弥生ちゃん！」

仰向けに倒れた弥五衛門を、八重は抱きしめました。喉と腹部に穴が空いて、血が噴き

出しております。

「弥生ちゃん、弥生ちゃん！」

「そう……」

弥五衛門は、やっと声を出しました。

「私は、弥生……」

そのまま絶命。

「やったな！」

小夜と菊乃は、おたけびをあげながら突進し、慌て火縄銃に弾をこめ、次の発射を準備する同心二人を斬り倒しました。

同心のすぐ後ろにいた小幡越後守は、小夜と菊乃の怒りに満ちた眼が向けられるのに怯え、傍らにいた平井権八と小幡伝太夫に向かってわめきます。

「あいつらを斬れ！ わしを守れ！ わしが死ねば仕官も養子の口もないのだぞ！」

その言葉に、平井と伝太夫、意を決して、それぞれ小夜と菊乃に斬りかかっていったのです。

「し、死ねえ！」

小幡伝太夫はがむしゃらに太刀を振り回しました。

「貴様、あの時、偉そうに演説しやがったな。天下の治安を守り、万民を慈しむことこそが武家の役目だと？ 俺ら部屋住はなあ、嫁ももらえず、役目にもつけず、一生飼い殺しなんだ。憂さ晴らしに賤しい連中を斬って何が悪い？ 全部、御公儀の理不尽な法のせいだ！ 社会が悪いんだ！ 俺は被害者なんだ！」

「お前、それでも武士か！」

伝太夫の太刀を巧みに避けながら、菊乃は叫びます。

「いや、逆だ。お前こそ武士だ。既得権の上にあぐらをかいて、のうのうと無為徒食の生活を送っている癖に、つまらぬ不満を弱いものにぶつける。それが武士ならば……」

菊乃は、伝太夫が振り下ろした太刀を受け止め、右足を跳ね上げました。

爪先が、伝太夫の鞞丸を蹴り潰しました。

伝太夫、両手で股間を抑え、眼を見開いて硬直。

その両眼を、太刀を薙いで切り裂き、菊乃は言いました。

「武士なんぞ、潰れてしまえ！」

ぎゃあああああ!!!!!!

伝太夫、斬られた両眼と潰された睾丸を両手で抑え、地面をころげ回って七転八倒。

「なぜ……?」

小夜は、平井権八を見下ろして問いました。

「それほどの技を持ち、見栄えもいい男なのに、どうしてこんな真似を」

「どうだっていいじゃねえか……」

平井は、小夜に斬られた腹部から、はみ出ようとする内臓を手で押さえながら、虫の息で答えました。

「俺は……女嫌いだ。女は男を迷わせ、すぐ裏切る。だから、大勢の夜鷹を斬った」

「では、夜鷹を辻斬りしていたのは、お前だったの?」

「俺はその一人だ。他にも仲間がいたが、お前が全て、去勢しやがった……」

「そうなの……あの連中はあんたの仲間だったのね」

小夜は天を仰いで唇をかみしめ、

「では、お仲間と同じ目にあわせてあげる!」

怒気もあらわに歩み寄り、平井の股間を踏みつけました。平井は絶叫し、両手で小夜の足首を掴つかみました。

「そ、それだけはやめてくれ……殺されてもいいから、きんたまだけは……」

「潰されたくなかったら、白状なさい!」

小夜は、平井のはみ出した内臓を掴つかみました。睾丸と腸、敏感な内臓を圧迫され、激痛に痙攣けいれんしながら、平井は、

「や、やめて……ください……」

と懇願します。小夜はさらに怒鳴りました。

「これだけの人数を、お前たちだけで集められるはずがない! 黒幕は誰?」

「あいつです」

平井は号泣しながら、立ちつくす小幡越後守を指さしました。

「江戸じゅうの夜鷹を辻斬りすれば、幕府公許の遊郭が繁盛し、自分も栄達すると……」

「よく言った、楽にしてあげる!」

小夜は、唐人剣を一閃させ、平井の首は宙を舞いました。

「おい、何をしている！」

小幡越後守は、残った三十余の武士たちに向かって叫びました。

「は、早く、女どもを殺せ！」

しかし、すでに武士たちは戦意を喪失していました。みな、太刀を鞘さやに収め、わっと叫んで小貝の森の入り口めがけて走りだしたのです。

「あ、待て、おい……！」

慌てて越後守が後を追おうとした時、逃げだそうとした武士たちが、一斉に棒立ちになりました。

「者ども！」

額に白鉢巻きをまき、薙刀なぎなたを構えているのは、身分の高そうな熟年女性。背後に、薙刀を構えた腰元たちを従えており、さらに武家娘や町娘ら大勢が、手に手に、薙刀、包丁、物干し竿モノヅナなど思い思いの武器を手に続いております。

「われらが小夜様を害せんとする、悪者ども、一人残らず成敗せい！」

喚声をあげて武士たちに襲いかかった女たちの姿に、

「誰？」

菊乃が問うと、小夜は苦笑して言いました。

「蜂須賀の奥方はじめ、わたくしの御鼻筋ミハナシよ」

「八重ちゃーん！ーん！！！」

続いて森の入り口に現れたのは、手に棒を持った夜鷹たちでした。

「あー、みんなー！！！！」

八重は歓喜して、ぴよんぴよん飛び跳ねました。

「あたいは無事だよー！！！」

「よかったー！」

大喜びする夜鷹たちに、先頭切って走ってきたお葉おはが呼びかけます。

「八重さんや小夜さんに、今こそ、恩返しだよ！」

と、武士たちに襲いかかったのです。

たちまち三十余人の武士たちは、武家の女たちの薙刀に斬られ、町娘たちの棒に殴られ、倒れた者たちは、夜鷹たちに牽丸を潰されました。

ひいい、助けてえ！

謝ります、勘弁してください！

い、命だけは……。

「うるさい！」

奥方、姫君、町娘、夜鷹たちは情け容赦ありませんでした。

「辻斬りに斬られた夜鷹たちの恨み、思い知れ！」

「よくも、わたしたちの小夜さまを！ 許しません！」

それを見ながら八重、

「弥生ちゃん、観て……」

絶命した弥五衛門を抱きしめながら言いました。

「あんたが鍛えてくれた夜鷹たちが、武士たちと立派にやりあってるよ」

かくして、集まった百人の武士たちは全滅したのです。

残るは、腰を抜かして、わなわなと震える町奉行、小幡越後守だけでした。

「さて……」

小夜は、越後守の前にしゃがみこんで、言いました。

「残るは、この人だけ。どうするの？」

「私は、もういい……」

菊乃は、小夜の肩にもたれかかりながら、言いました。

「疲れた……こんなに戦ったのは初めて。実際に関ヶ原合戦とかに出て生き残ったら、こんな感じだったのかな」

「あたかも、なんだか満足しちゃった……」

八重は、死んだ弥五衛門を抱きしめながら、消耗しきった三人の女と、怯えて失禁して座り込む越後守を取り巻く女たちに向かって言いました。

「お葉さん」

「なに？」

「こいつが、夜鷹の辻斬りを命じて、私腹をこやそうとしてたんだって」

「なんだって！」

お葉をはじめ、夜鷹たちは口々に怒声を発します。八重は続けました。

「あんたも、殺されなかったでしょ、お葉さん」

「そうだったね」

「あんたに任せるよ」

「あたいに？」

「ああ、そうだ」

お葉以下、集まった夜鷹たちを眺め回して、八重は言いました。

「夜鷹であつても力を合わせれば、町奉行をやっつけられる……それを天下に思い知らせてあげようぜ」

「ああ、そうだね！」

お葉は言いました。

「同じ人間だ。同じ男だ。きんたま蹴れば、町奉行だろうが、町人だろうが、同じようにわんわん泣きわめくさ」

「や、やめてくれえー！」

小幡越後守は、股間を両手で抑えて哀願しました。

「このとおり、謝る。金は払う。だから、助けてくれえー！」

「うるせい！」

お葉は、土下座する越後守の尻を蹴り飛ばし、思わず浮かせた股間をつづけざまに蹴り上げ、悶絶する小幡を見下ろしながら、夜鷹仲間にも声をかけました。

「おう、みんな、こいつのきんたま、ぶっ潰すぞ！」

その日。

小貝の森では、七十余の武士が斬られ、三十余が辜丸を潰されました。

「あっぱれなり！」

最後の一人である小幡越後守が、辜丸を潰され、さんざん女たちの足蹴にされて悶死した後、蜂須賀家の奥方が声を張り上げました。

「小夜」

返り血に真っ赤に染まり、菊乃と八重に左右からもたれかかられながら、肩で息をする小夜の傍らに膝をつき、その手をとって奥方は言いました。

「お前にはずいぶん世話になった。みごとな働きであつたが、仮にも町奉行以下、旗本の子弟百余を打ち倒しておいて、御公儀ごうぎが見過みすごすとは思えぬ。なにか、わらわに手助け出来ることはあるか」

「そうですね……」

小夜は言いました。

「どこか、女たちだけで暮らしていける別天地はありませんか」

「別天地？」

「ええ、ここにみんなで移り住んで、面白おかしく暮らせるような……」

「そうじゃな……」

奥方は首を傾げて考えておりましたが、やがて手を打ちました。

「わが蜂須賀の知行地である阿波（現在の徳島県）の沖に、小島がある。瀬戸内の海を行き来する船乗りたちや、紀州（現在の和歌山県）の鯨取りたちが停泊地に使っている島で、水も出るし、畑も耕せる。そこで、そなたの芸を見せ、船乗りたちを慰めてくれぬか」

それから女たちを見回し、

「その方らも、望むならば、その島で暮らすがよい。蜂須賀家が援助するほどに」

と言うと、女たちから何人かがおずおずと寄ってきて、

「あの……小夜さんと、一緒に行くのですか？」

「そうじゃ」

「船乗りたちといえば、荒くれぞろいと聞きますが、大丈夫でしょうか？」

「そのために、母衣菊乃どの、八重どの」

奥方は、菊乃と八重に声をかけました。敬称で呼ばれ、八重の背筋がぴんと伸びます。

「そなたらが、女たちを守ってやっておくれ」

「わかりました！」

菊乃は疲労で重い身をやつと動かし、奥方の前で手をついて頭を下げました。

「母衣菊乃、やっと武士の娘として、やるべき事が見つかりました！」

「なんだか、勝手に話が進んでいるわ……」

小夜は朦朧と重い瞼をやつと開けて、八重にささやきかけました。

「八重さん、あなたは、それでいい？」

「いいんじゃない？」

八重は答えました。

「なんだか楽しそうじゃん」

小夜は、八重の肩を抱きしめ、その頬に己が唇をあてながら言いました。

「菊乃さんとのいざこざだけは、やめてね」

「わかった」

八重は、微笑んで言いました。

「あたいたちお互い誰のものでもない。みんな仲良く、楽しく暮らそうね」

（おわり）

